

## 《研究ノート》

## 欧州議会と欧州懐疑主義： 欧州保守改革グループ（ECR）の場合

*The European Parliament and Euroscepticism:  
a Focus on the European Conservatives and Reformists Group*

白 井 陽一郎\*

### 要旨

EUの欧州議会に形成された欧州懐疑主義政治グループについて、その研究状況を次の3点から概括的に整理した。第1、欧州議会およびその議会内政治グループへの研究関心。第2、(各国政治ではなく)欧州議会内の欧州懐疑主義を対象とした先行研究。第3、ソフト欧州懐疑主義と特徴づけられる欧州保守改革グループ(ECR)を取り上げた先行研究、とくにドゴール主義およびイギリス保守主義の伝統を受け継ぐユーロリアリズムと呼ばれるECRの基本理念に着目した研究。本稿は以上の先行研究に、中東欧の権威主義化の要因を探った研究と、オルバン首相による反リベラリズム的キリスト教共同体論の政治スピーチを対置した。ECRの構成メンバーに占める中東欧各国の比重が高まっているのがその理由である。それにより、一見、EU政治システムへの最低限の順応はみせているかにみえるECRの言説が、ここ10年の動向とくに直近のオルバン首相率いるフィデス党のECR参加をめぐる動きの中で、場合によっては反EUリベラリズムの色彩をいっそう強めていく可能性も含めて、今後の可変性に留意していくべきだとする視点を示唆しておいた。なお、本稿は先行研究レビューを主とするものであって、研究論文の域には達しておらず、ひとつの研究ノートに過ぎない。

キーワード：EU 欧州議会 欧州懐疑主義 欧州政党 アトランティシズム  
欧州保守改革グループ(ECR) オルバン 権威主義

### はじめに

EUの欧州議会で活動する欧州懐疑主義政治グループのEU批判言説を把握し、EUリベラリズムとの関係を検討することが、本研究の目的である<sup>1</sup>。EU批判の懐疑主義とEU支持のリベラリズムは、相互に妥協可能だろうか。それとも宥和なき矛盾の関係にあるというべきだろうか。EU政治システム内で両立可能な関係か、それともいずれかの変容もしくは排除以外にシステムの安定は不可能となるような関係か。本稿はこうした研究を進めていく準備作業のための研究ノートである。今回は事例として、ソフト欧州懐疑主義とも形容される欧州保守改革グループ(European Conservatives and Reformists Group: ECR)を取り上げてみたい。その欧州統合思想は、ユーロリアリズム(Eurorealism)と呼ばれる。ブリュッセルの権力を強化し加盟国の主

\* USUI, Yoichiro [国際学部 国際文化学科 教授]

<sup>1</sup> 本稿は科研費研究プロジェクトの成果の一部である。科研費研究課題基盤研究(C)「欧州懐疑主義政党がEUの対外政策に与える影響に関する基礎的研究」(課題番号23K01281)。

権を損なう EU の連邦化には強く反対するものの、シングルマーケット（自由市場資本主義）およびアトランティシズム（アメリカとの大西洋同盟）の維持発展には強いこだわりをもつのが、その特徴である。今後、他の機会をまっけて、急進右派のアイデンティティとデモクラシー（ID）グループや、急進左派の左翼（The Left）グループに焦点をあて、本年（2024 年）6 月に実施される欧州議会選挙の結果分析も織り込みつつ、先行研究のレビューも拡張しながら、研究を進めていく予定である。

今回の研究ノートでは、まずは欧州議会選挙の事前情勢を把握しておきたい。本研究で取り上げていく欧州懐疑主義政治グループの、文字どおりの躍進が予想されているからだ。欧州懐疑主義研究の重要性は、これまで以上に高まっている。次に、欧州議会内の欧州懐疑主義に注目する研究動向を、ごく概括的に把握しておく。欧州懐疑主義の歴史は古く、その研究もすでにメインストリーミング化していると評価できるのだが（Leruth, Startin and Usherwood 2018 など）、その主たる対象は各国政治のなかの欧州懐疑主義であって、欧州議会で活動する欧州懐疑主義については、ブラックの優れた研究（Brack 2018）が重要な土台を作り上げているものの、研究の蓄積がまだまだ必要な段階にある。欧州議会をアリーナとした欧州懐疑主義の言動は、EU 政治システムの安定性を評価するうえで重要な研究対象であるという視点を、本研究ノートで強調しておきたい。

以上の概括的整理ののちに、ECR を主題とした先行研究を取り上げる。元々はイギリス保守党が——すぐ下に記す統合主流派 EPP から脱退し——創設した政治グループであり、ソフト欧州懐疑主義と形容されるそのスタンスは、上述のようにユーロリアリズムとも呼ばれる。EU に否定的な急進右派のハード欧州懐疑主義とは差異化されるのではあるが、他方で、キリスト教民主主義系の EPP や、社会民主主義系の S&D、中道リベラルの Renew Europe（欧州刷新、RE）の三派が結んだいわゆる統合推進グランドコアリション——EU 立法や欧州委員長人事などで同一歩調をとるという合意——との間にも、明確に一線が画される。現状の“フェデラル・ヨーロッパを目指すブリュッセルの EU”に対して、国民国家の協力によるヨーロッパを死守しようとする ECR の基本路線は、規制と税を最小限にした小さな国家路線、シングルマーケットによる自由市場資本主義そしてアトランティシズム（大西洋主義、Atlanticism）によるアメリカとの西側同盟を 3 本柱とする、ヨーロッパ保守主義だと位置づけられる。ブレグジットにともないイギリス保守党が脱退したのちに自然消滅することもなく、ポーランドの法と正義（PiS）を中心に中東欧諸国の政党の受け皿となり、イタリアの同胞やスペインの VOX の参加もあって、欧州議会内で 5 番手の位置を占めるに到っており、後述のように、2024 年 6 月の欧州議会選挙で躍進が予想されている。イギリス保守党のレガシーがポーランドの法と正義の国内政治に生きているようにはみえず、ECR のイデオロギーは権威主義化する中東欧政権政党の隠れ蓑に過ぎないのではないかとの見立てもありえそうであるが、本研究ノートでは、ECR に関する 2 本の先行研究を整理し、欧州議会内のイデオロギーと国内政治イデオロギーの別枠化が生じているという指摘に注意を引いておきたい。

そのうえで、イギリス保守党のレガシーとは明確に異なる中東欧の権威主義化について、先行研究に当たりながら考察を加えていく。EU と NATO は、自国の政治に介入しないかぎりにおいて、中東欧諸国には重要存在基盤となり続けるのだが、問題は、EU レベルのヨーロッパ保守主義と、各国レベルの権威主義を結びつけ両立させる理念である。家族主義的民族主義的キリスト教共同体路線が、ひとつの方向となる。ハンガリー首相オルバンのイデオロギーにこれを確認

しておきたい。以上の先行研究整理のあと、ECRの最新状況にふれたうえで、次の課題を明示しつつ、本稿を閉じることにする。

なお、Euro-scepticismの訳語だが、本稿で採用した「欧州懐疑主義」は、適切とは言えない。懐疑を主張する政党はEUを批判しているのであって、欧州という枠組それじたいを否定するわけではない。しかも、EUを否定するのではなく、どこまでも“ブリュッセルのEU”が批判の対象となる。とはいえ、カタカナのまま“ユーロ”懐疑主義とすれば、単一通貨ユーロへの懐疑だと誤解されかねない。ユーロスケプティシズムは通貨統合に限定された政治の主張ではない。“ブリュッセルのEUが作り上げてきたヨーロッパ”への懐疑なのである。したがって、結局は本邦にでもっともよく使われている欧州懐疑主義という直訳を採用しておきたい。

## 1. 2024年6月欧州議会選挙戦、前半の状況

本年(2024年)6月に欧州議会選挙が実施される。EUの今後にとって極めて重要な選挙となる。上述のグランドコアリションにヨーロッパ・グリーンを加えた統合推進4派が議席を減らし(マイナス40議席が見込まれている)、反ブリュッセル・欧州懐疑主義勢力が躍進すると予想されているからだ(以下Cunningham and Hix 2024の調査を参照した)。推進派は、EPP(キリスト教民主主義系、中道右派)、S&D(社会民主主義系、中道左派)、RE(リベラル系、中道)のグランドコアリションに、Greens/EFA(環境主義系)を加えた4グループから構成されるが、このうちREは第3党の地位を失い、S&Dも場合によっては第2党から引きずり下ろされかねない情勢である。グランドコアリション3派は、過半数を維持したとしてもぎりぎりまで追い込まれそうである(2024年1月現在)。

躍進が予想される欧州懐疑主義政治グループはID(アイデンティティとデモクラシー、極右)そして本稿で取り上げるECR(欧州保守改革グループ、右派・中道右派)であり、実に大幅な議席増が見込まれている(表1参照)。IDはプラス40議席、ECRもプラス18議席が予想されている。IDとECRを構成する各国政党は、すでにいくつものEU加盟国で政権に食い込んでおり(イタリア、フィンランド、スウェーデンなど)、政権参加は今後さらに広がっていきそうである(オランダ、オーストリア、ベルギーで予想され、ドイツとフランスで“脅威”とされている)。

2010年代以降いち早く中東欧で権威主義化が進み、反ブリュッセルを標榜する懐疑主義政権が誕生していたが(ハンガリー、ポーランドなど)、現在ではまるで西欧・北欧が中東欧にキャッチアップしているかの様相である。もちろん、欧州議会720議席<sup>2</sup>の過半数が急進右派および右派の諸派によって席卷されるわけではないにしろ、キリスト教民主主義系と社会民主主義系および中道リベラルが中心となり、場合によってはヨーロッパ・グリーンが補強する形で、EU・欧州統合推進派の過半数が持続的に維持されてきた構図は、確実に修正されねばならない状況だ。第二次世界大戦後の欧州統合の、節目ともなりうる欧州議会選挙戦がいま、闘われている。

<sup>2</sup> 欧州議会の議席数はEU条約第14条2項により最大751議席と決められているが、Brexitによる調整で現在は705議席に減らされていた。2024年6月の欧州議会選挙では調整がはかれ、720議席に増加する。加盟国別ではスペイン、フランス、オランダが2議席増、ベルギーやデンマーク、アイルランド、ラトヴィア、オーストリア、ポーランド、フィンランド、スロヴェニア、スロバキアが1議席増とされている。以上は欧州議会のWEBサイトでアナウンスされている。< <https://www.europarl.europa.eu/news/en/press-room/20230911IPR04910/2024-european-elections-15-additional-seats-divided-between-12-countries> > (accessed 23 February 2024)

表1 2024年欧州議会選挙予測 (ECFRの調査)

	現議席	予測	増減
ID	58	98	+40
ECR	67	85	+18
The Left	38	44	+6
無所属	51	42	-9
EPP	178	173	-5
S&D	141	131	-10
Green / EFA	71	61	-10
Renew Europe	101	86	-15

右派・急進右派の政党ごとの予想

[ECR 所属]	
イタリアの同胞	6 → 27 議席
ポーランド・法と正義	27 → 20 議席
スペイン・VOX	4 → 7 議席
スウェーデン民主党	3 → 6 議席
真のフィンランド人	2 → 3 議席
[ECR 所属が予想される]	
ハンガリー・フィデス	13 → 14 議席
[ID 所属]	
フランス・国民連合	23 → 25 議席
ドイツのための選択肢	11 → 20 議席
オランダ・自由党	1 → 10 議席
イタリア・同盟	29 → 8 議席
オーストリア・自由党	3 → 6 議席
ポルトガル・シェーガ	0 → 4 議席
ポーランド・自由独立連盟	0 → 4 議席
ブルガリア・リバイバル	0 → 3 議席

資料：Cunningham and Hix (2024); Soler (2024) より筆者作成。

## 2. 欧州議会における欧州懐疑主義の研究

### (1) 欧州議会に着目するEU研究上の意義：前例なき脱国家機関か、比較可能な立法府か

欧州懐疑主義の研究は、元々は欧州各国の国政への影響が主題とされ（政党論も射程にいれつつフランスに焦点を当てた吉田2011など）、2010年代にはポピュリズムの勃興との関係が指摘されてきた（福祉ショービニズムに注意を引いた原田2018など）。リベラル・デモクラシーのバックスライディングが反EUの政治主張と同時並行的に生じ、反EU右派ポピュリスト政党の存在が“問題視”されていた（政治思想の大きな流れに位置づけた徐2021など）。欧州議会の欧州懐疑主義を研究対象として措定するには、したがって説明が必要である。なぜ欧州議会をアーリーとした欧州懐疑主義の研究が必要なのか。理由はふたつあげられる。欧州議会の権限拡張が

ひとつ、もうひとつが欧州議会内政治グループの発展である。

EU政治研究のなかで、欧州議会は他の主要機関と比べて、比較的遅れてやってきたテーマである（ただし日本で早い時期にこの機関に注目していた研究として金丸1982、児玉2004）。当初は権限なき諮問機関にすぎなかったこの機関は、1979年の第1回選挙以来、着実に権限拡張を実現してきた。やがてEUの立法過程における共同体方式——欧州委員会が提案・EU理事会と欧州議会が共同決定——の一角を占めるようになる。いぜんとして議員立法はほとんどの場合認められず、証人喚問の制度も十全には整備されておらず、欧州委員長の指名についても欧州理事会に対して十分な力を手にしているとは言い難い。そもそも筆頭候補制が適切に機能していないという現実がある。事実上の議院内閣制というにはほど遠い現状だ。しかしそれでも、通常立法手続きにおけるEU理事会との共同決定は（安全保障などを例外として）ほぼ全分野で適用されるようになり、予算についても、国際条約についても、欧州議会の承認なくしてEU政治は動けないという域にまでは辿り着いた。これは、欧州議会内で最大勢力を確保した政治グループが、EUの拒否権プレーヤーとしての地位を確立することができるということを意味する。何かを作ることにはできないが、何かを作らせないことは可能なのである。

こうして権限を拡張し、欧州選挙の実績も積み重ねてきた欧州議会には、政治グループが形成された（最新の包括的整理としてBrack and Wolfs 2023; デイ 2020）。EUはこれを欧州政党として育てようとしてきた。EU条約第10条4項に次のような認識が表明されている。

「欧州次元の政党は欧州政治意識の形成と EU 市民の意思の表明に寄与するものである。」(EU 条約第 10 条 4 項)

欧州議会内政治グループは、全加盟国の 4 分の 1 以上、23 名以上の議員を最低要件とするよう定められ、この基準をクリアし届け出ると、政党助成金が交付される。この助成金は最大勢力 EPP で 20 億円ほど (1€160 円) になる<sup>3</sup>。現在のところ 7 つの政治グループが形成されている。上述のいわゆるグランドコアリションと呼ばれる 3 グループと、環境主義の Green/EAF、右派および中道右派の ECR、急進右派の ID、急進左派の The Left である。こうした政治グループそれぞれが欧州政党と呼ぶに値する組織性を備えているかどうかについては、いまだ否定的な評価を下さざるを得ないが、しかし欧州市民の価値を EU レベルへと媒介する EU 政治システムの一翼を担っていることは確かである。政治グループはその議席数に応じて、欧州議会内の委員会で議長職を獲得し、欧州委員会法案への修正案をリードする役割を果たしていく。加えて、EU に対するロビー活動の対象ともなる (参照すべき研究として西川 2023)。政治グループなどへの適切なロビー活動の実現を目指す団体も存在する (たとえば The Good Lobby など)。

こうして権限を拡張し、政治グループを発展させてきた欧州議会は、EU の政治システムの研究にとって重要な対象となってきた。欧州懐疑主義が EU に影響を与えるルートが増設されたのだと、言い換えることもできよう。

もちろん、各国政治をアリーナとした欧州懐疑主義が各国政府を通じて EU に影響を与える、政府・理事会ルートの重要性が低減したわけではない。この場合、各国世論から政権政党そして EU 理事会/欧州理事会へという影響力の流れとなる。欧州懐疑主義が各国総選挙でどの程度の影響力を発揮するかが注目される。ただし、国内で欧州懐疑主義に直面している政府が、親 EU・統合推進派の政党に率いられている場合、その政府は他の加盟国政府と比べて、理事会で強い交渉力をもつと結論づけた研究もある (Mariano and Schneider 2022)。この研究では、欧州懐疑主義を制限しようとする文化が欧州理事会・EU 理事会に存在するという側面が強調される。親 EU 政府は相互に支援し合うという文化が理事会に観られるというのである。したがって理事会に今以上の欧州懐疑主義的政府が登場するようになれば、この文化は変わっていく。

それに対して、もうひとつ、各国を選挙区とした欧州議会選挙を通じて、欧州懐疑主義勢力が EU に影響を与えるルートが確立されてきたのである。各国欧州懐疑主義勢力が欧州議会選挙で越境連携することもあり、まさにトランスナショナルな政党政治に擬した選挙戦が闘われる。欧州議会内政治グループは、EU の政策をめぐる、また EU の存在そのものをめぐって、キリスト教民主主義、社会民主主義、中道リベラル、環境主義、保守主義、急進右派、急進左派という 7 つの政治党派を EU 市民に用意してきた。EU のデモクラシーの赤字という批判を考慮するとき、このことの意味は大きい。デモクラシーの赤字とは、EU で政策統合が進めば進むほど、加盟各国議会の権限が失われ、欧州委員会と EU 理事会のいわば行政連合による統治が進んでしまう現象を指す。しかも、EU 理事会では各国の国益を調整する必要があるため、その合意は最小公倍数となる傾向が強く、他方で欧州委員会は総選挙による政権交代というプレッシャーがないこともあり、すでに確立された価値理念をリポートすることに終始する傾向が観られる。欧州統合を

<sup>3</sup> 各政治グループへの補助金一覧が、欧州議会の Web サイトに掲載されている。

<<https://www.europarl.europa.eu/contracts-and-grants/files/political-parties-and-foundations/european-political-parties/en-funding-amounts-parties-2023.pdf>> (accessed February 22, 2024)

めぐる価値言説対抗関係が構築されるのは、欧州議会である。しかし、その研究が一筋縄ではない。

ランドルフによると、欧州議会は新たなタイプの政治アクターを出現させたのだという (Landorff 2019: 17)。上述のように、欧州議会は純正なる立法府とは異なる。どこまでも国際機関の一種ではある。けれども、欧州議会議員はけっして政府に指名された国家代表として国際機関で働く職員ではない。EU 市民に選挙で選出される代議員である。とはいえ、立法の拒否はできても提案はできない。欧州議会議員がいったい誰の代理人であるのかは、シンプルには答えの出せない問題である。ランドルフは欧州議会議員の多面的支持基盤に注意を引く。欧州議会議員とは加盟国有権者の代表であり、EU 市民の代表であり、加盟国の政党の一員であり、欧州議会内政治グループの一員でもある。党議拘束にしばられることのない、かなりの裁量が認められた政治アクターである (*ibid.*, 17-18) <sup>4</sup>。

欧州議会内政治の研究資料は、過去の欧州議会選挙を経て充実している。とくに欧州懐疑主義政治グループに関しては、2009 年、2014 年、2019 年と 5 年ごとの欧州議会選挙のたびに、研究が蓄積されてきた(日本では極右グループへの制度的対応を取り上げた兎玉 2021 の研究がある)。いまだ発展途上ではあるが、もはや EU 政治研究の周辺のテーマだとは言えない。その研究状況について、次に概括的に把握しておきたい。

## (2) 欧州懐疑主義政党の研究：システムに組み込まれた反体制派？

ブラックの研究 (Brack 2012; 2018; Behm and Brack 2019)

まずはなんといっても、ブラックの研究が重要である (Brack 2018)。欧州議会の欧州懐疑主義という研究テーマのパイオニアであり、この研究の強固な基盤を作り出してきた。その基本の問いは、欧州懐疑主義のジレンマである。欧州懐疑主義者は、EU を批判することによって選出されたにもかかわらず、その当の批判の対象である EU のなかで、自らの職責を全うしなければならない。このジレンマが、欧州議会内欧州懐疑主義者たちの、態度、動機、戦略にどのように現れているのかを調査したのが、ブラックによるこの重厚な研究である。もちろん、ベルギーやスペイン、イギリスといった分権型国家でも、分権的政治システムへの批判者は存在し、その批判ゆえに議席を獲得するという場合があるだろう。しかし、EU とは自らの正統性が絶えず問われる政治システムである。長い歴史に立脚した国民国家としての連邦制とは明確に異なる。正統性基盤が比較的危うい政治システムの中核に、当のシステムへの批判者が入り込んで行った場合、いったい何が生じるのか。ブラックの研究は、EU 政治システムの安定性という視点からも貴重である。欧州議会という EU 機構の一角に存在する欧州懐疑主義勢力は、システムの破壊要因となってしまうのか、それとも EU が反対派を取り込む実績となり、そのデモクラシーを強化する契機となるのか (なっているのか)。こうした基本の問いを論じていくうえで、ブラックの研究は重要な土台となる。

このブラックの研究書は 2012 年の論文を発展させたものでもある (Brack 2012)。その研究では、ハード欧州懐疑主義の議員に焦点をあて、欧州議会での行動を 3 パターンに類型化したうえで、数量分析を実施している。EU に反対する議員の行動類型のひとつめは、不関与 (absentee)

<sup>4</sup> こうした独特の制度構成の欧州議会内力学を分析するためにランドルフが着目したのが、インフォーマルグループであった。まさに欧州議会という独特の機関がもつ制度的特徴である。ただし本稿では議会内政治グループに着目するため、この研究には立ち入らない。

を通じた離脱戦略 (an exit strategy)、次にプラグマティスト的行動による発言権確保戦略 (a voice strategy)、最後に大衆向け演説者 (the public orator) である。3つめの類型では、懐疑主義議員は欧州議会の通常業務に継続的に参加しつつ、特定の政策領域では貢献さえみられるものの、EU 離脱を明言しながら EU を弾劾する発言を繰り返す。そして実際に離脱へ向けた運動を起こすわけではない。問題は、いったい何がハード欧州懐疑主義議員の行動選択に影響を与えるのかである。ブラックはさらに欧州ビジョンと制度コンテクストのふたつに着目し、EU に敵対的であつ政府間主義を志向する場合には離脱戦略や大衆向け演説者のパターンが多く、同じく政府間主義を志向しても EU 制度改革を選好する場合には、その議員は発言権確保戦略に走る傾向が見られるという (*ibid.*, 162-3)。この研究のあと、ブラックはベームとの共著により、第6期、第7期、第8期の欧州議会を事例として、欧州懐疑主義者の議会活動はけっして破壊的なものではなく、正常化していると結論づけている (Behm and Brack 2019: 1083)。

#### ベルツェルとハートラップの研究 (Börzel and Hartlapp 2022)

以上のブラックの研究が個々の議員の行動パターンの正常性・異常性を問題にしたのに対して、ベルツェルとハートラップは、そもそも欧州懐疑主義者たちが政治グループとしての凝集性をみせているのかどうかを問う。この研究によると、欧州懐疑主義政治グループが親 EU 主流派の政治グループとの間にどのような対抗関係を構築するのは、けっして一般化できないという。つまり EU 批判者対 EU 支持者の間の例外なき闘争が到るところに生起しているのではなく、政策分野ごと、欧州議会内の委員会ごとに異なるという分析結果である (*ibid.*, 116-7)。ただし、ベルツェルとハートラップによると、GAL (グリーン・オルタナティブ・リバタリアン) 対 TAN (伝統・権威・民族) が争点として浮上する反差別、マイノリティ権利、ジェンダーなどの政策分野では、懐疑主義グループにはまとまる傾向がみられるという (*ibid.*, 98,117)。とはいえ、全体としては、欧州懐疑主義の反体制派と親 EU の主流派の間に、シンプルな対抗関係が恒常的に観られるわけではない。欧州議会内の、柔軟で多党派包摂的な過半数作りという行動が観察可能だという。したがって、欧州議会内の欧州懐疑主義政治グループは、欧州統合を政策分野ごとによりいっそう分化 (differentiated) させることになるという洞察が、この研究から導き出せる (*ibid.*, 117)。ベルツェルとハートラップの研究の重要な貢献である。

#### トライブの研究 (Treib 2021)

以上のミクロ的視点の研究に対して、トライブによるマクロ的視点の研究を対置しておきたい。後者による前者の意味づけが可能になるだろう。トライブによると、欧州懐疑主義の現象は、EU 政治における中央周辺分断の発生を意味する。これは、国民国家形成過程に生じる行政の集権化と文化の均質化に抵抗して、地域それぞれの多様な伝統を守ろうとした抵抗運動とのアナロジーで観ることも可能だと、トライブは主張する (*ibid.*, 175)。この見方からすれば、欧州議会内の欧州懐疑主義政治グループに対する、いわゆるコルドン・サニテール (隔離線) の設置は、間違った方策だと判断されることになる (*ibid.*, 185)。むしろ、コンセンサス・デモクラシーを目指すコンソシエーション (多極共存的) な方向での包摂が求められる局面が必ず出てくると、みるべきである (*ibid.*, 185)。これまでみてきたブラック、ベーム、ベルツェル、ハートラップの研究からも明らかのように、欧州議会内の欧州懐疑主義政治グループは、必ずしも制度破壊的な反 EU 的言動を見せつけているわけではない。むしろ、欧州議会内では EU システム適合的な

行動パターンすら示している。トライプが示唆したコンソシエーションな方向性という視点に留意しておきたい。

### 3. ECR の言説：ヨーロッパ保守主義のユーロリアリズム

#### (1) ECR の研究

欧州懐疑主義は、その EU 批判の強度に応じて、ソフトとハードの二種に分けられるのが一般的だ (Szczerbiak and Taggart 2018)。本稿ではソフト欧州懐疑主義を取り上げてみたい。欧州議会内政治グループでは、欧州保守改革グループ (ECR) がそれに当たる。本稿執筆時点では、68 名の欧州議会議員を擁し、構成政党数は 21、加盟国数は 17 におよぶ (主要構成政党は、法と正義 (ポーランド)、VOX (スペイン)、チェコ市民民主党、新フラームス同盟 (N-VA)、スウェーデン民主党、ポーランド連合 (SP)、ブルガリア国民運動、真のフィンランド人など)。トランスナショナル政党グループと呼ぶにふさわしい規模だと言えよう (最新の数値は ECR のサイト <https://ecrgroup.eu/ecr> 参照)。本稿では 2 つの先行研究を取り上げておきたい。ひとつは ECR にドゴール主義とイギリス保守主義 (そしてあくまでも部分的にはあるがアイルランド共和国の) 潮流を見出そうとする研究であり、もうひとつは、ブレグジット後にイギリス保守党からポーランドの法と正義へとリーダー政党が移行したあとの継続性に焦点を当てた研究である。

#### レルースの研究 (Leruth 2018)

右派のソフト欧州懐疑主義に、ドゴール主義とイギリス保守主義 (そして部分的にアイルランド共和国) の歴史的伝統を見出そうとしたのが、レルースの研究である。ドゴール主義に基づく欧州議会内政治グループは 1973 年に結成された。グループの名称はまずは欧州進歩民主党 (EPD: European Progressive Democrats) とされ、1984 年に欧州民主主義同盟 (EDA: European Democratic Alliance) に変更、1995 年に消滅した。フランス右派政党が見切りを付けたのであった (*ibid.*, 385-6)。他方、イギリス保守党は 1979 年に欧州民主主義グループ (EDG: European Democratic Group) を設立、欧州民主党 (ED: European Democrats) と名称変更し、1992 年まで続いた。1992 年にイギリス保守党は EPP (欧州人民党) に参加、その名称を EPP - ED (欧州人民党 - 欧州民主党) と変更するなど存在感を示したが、やがて 2009 年に脱退する。イギリス保守主義とヨーロッパのキリスト教民主主義の結婚は長続きしなかった (*ibid.*, 387-91)。脱退とともに、イギリス保守党は独自に ECR を結成するに至る (*ibid.*, 391)。2014 年選挙では欧州議会内第 3 党の地位を占めている (*ibid.*, 393)。しかしブレグジットのために、イギリス保守党はその ECR から 2019 年に脱退することになる。あともうひとつ、諸国家の欧州同盟 (UEN: Union for Europe of the Nations) を挙げておく必要がある。1999 年にネオ・ゴーストと呼ばれるフランス連合 (Rally for France) や中道のフランス運動 (MPF) が、アイルランドのフィアナ・フォイル (Fianna Fáil) やイタリア国民連合 (AN) などともに創設した政治グループで、2009 年まで続いた (*ibid.*, 387-9)。2009 年以降、この UEN の一部が ECR に合流している (なおフィアナ・フォイルは現在は Renew Europe に参加している)。以上のように、ECR に合流するイデオロギーの潮流を把握しておこうというのが、このレルースの研究である。右派ソフト欧州懐疑主義のパン・ヨーロッパ協力が継続してきたことを、歴史的事実として明らかにしておこうとしたこの研究は、欧州統合の思想潮流を見定めていくためにも重要である。ECR はこの右派

ソフト欧州懐疑主義の流れに、ユーロリアリズムという用語を当て、右派保守主義の（つまり社民やグリーンを除いた）グランドコアリションを可能にする基盤を維持しつづけてきたと、言えるだろう。

レールスは、ドゴール主義とイギリス保守主義によるソフト欧州懐疑主義を、次のように簡潔にまとめる。まずドゴール主義的ソフト欧州懐疑主義であるが、これは何といてもドゴール主義的ヨーロッパビジョンに立脚したイデオロギーである。フランスの独立が絶対的な優先事項となる。1965年空席政策がその典型的な現れである。ただし、国家の拒否権が維持される限りにおいて、欧州制度への機能移譲が許容される。その意味では絶対的な統合反対主義とは明確に異なる。国家主権のためのヨーロッパという強い原則がこの主義の特徴となる（以上 *ibid.*, 385）。イギリス保守主義的ソフト欧州懐疑主義も、基本的にはこうした国家主権絶対主義の路線に立つものである（*ibid.*, 387）。したがってEU（当時のEC）の財政支出に対する厳格な管理、とりわけ共通農業政策の改革が重要アジェンダであった（*ibid.*）。他方で、ドゴール主義との明確な差異もある。アトランティシズムをベースとした親マーケット路線という点で、英仏の両保守主義の間には分断が生じる（*ibid.*, 391）。アメリカとの西側同盟を死守したうえで、国家主権重視・EU改革主義が、イギリス保守主義の内容である。

レールスはこうした整理ののち、ECRの基本原則・基本政策について考察する。ECRはアトランティシズムという点では、イギリス保守主義の伝統を引き継ぐものであるが（イギリス保守党が創設した以上、当然ではあるが）、しかし思想の中心となる用語として選択されたのは、ユーロリアリズムであった。その基本理念について、レールスは、開放性・説明責任・デモクラシー・国家主権尊重・経済回復・成長と競争力を重視と整理しつつ、EU連邦主義に強く反対し、真の補完性（subsidiarity）の実現を目指すものだ、とまとめている（*ibid.*, 391-2）。レールスによると、この用語は元々はチェコ大統領クラウスやシンクタンクのブルージュ・グループなどが使用していたのだという（*ibid.*, 391）。ソフト欧州懐疑主義との間に明確な意味の相違があるとは言えないものの、両者の区分けの政治的意義は重要である。ユーロリアリズムという用語は、欧州解体（disintegration）を含意させない。むしろ、親リベラルな自由貿易志向を重視する、プラグマティズム、反フェデラリズム、フレキシブルな統合という路線を含意するのだという（*Ibid.*, 391-2）。こうしたレールスの解釈は重要だ。懐疑主義というイメージを作らない、しかし欧州大陸のキリスト教民主主義系および社会民主主義系の政治が作り出してきた超国家志向のEU統合路線を転換しようというのである。こうした党派が持続可能な存在として欧州議会で活動を続けているという事実は、EU政治システムの安定性について考察していくうえで重要になる。

上述のように（イギリス保守党が脱退する直前の）2014年欧州議会選挙では、ECRが躍進している。16加盟国から70人が参加、第3党の地位を占めた。特筆すべきことに、デンマーク国民党や真のフィンランド人といった急進右派政党が、ハード欧州懐疑主義政治グループの自由と民主主義のヨーロッパから移動してきたという点にも注意しておきたい。またベルギーの新フラームス同盟（N-VA）もECRに参加している。翌2015年には新規加盟の真のフィンランド人やポーランドの法と正義（PiS）そしてデンマーク国民党が、それぞれ自国の選挙で躍進している（以上 *ibid.*, 393）。こうした実績を背景に、2014 - 19期の欧州議会では、域内市場委員会や安保防衛下部委員会の議長職をECRが獲得している（*ibid.*, 394）。レールスはこうした整理ののち、2016年イギリス国民投票によるブレグジットの影響を問題提起して、論文を閉じている。イギリス保守党なきあと、ECRのゆくえは不透明だという。

## スティーブンとザービアックの研究 (Steven and Szczepiak 2023)

そのポスト・ブレグジットの ECR 動向を分析の俎上に載せたのが、スティーブンとザービアックの研究である。これは基本的には ECR 内の重要アクター——元党首ザフラジル (J. Zahradil、チェコ市民民主党 ODS 所属) やポーランドの法と正義 (PiS) 所属の欧州議会議員レグツコ (R. Legutko) など——へのインタビューにより、ECR の姿を浮かび上がらせた論文である。貴重な研究だ。イギリス保守党がキリスト教民主主義系の EPP から分かれ創設した政治グループであるにもかかわらず、イギリス保守党離脱後も持続性を保った ECR の、欧州統合思想上の意義は大きい。欧州議会レベルでもまた参加政党の各国内での状況という点でも、学術的分析を要する複合性ははらみつ、しかし ECR はキリスト教民主主義ともまた急進右派のハード欧州懐疑主義とも異なる、ヨーロッパ保守主義の重要なボイスであり続けた (*ibid.*, 585-6)。

その複合性であるが、ひとつは、スウェーデン民主党やスペイン VOX、イタリアの同胞などの急進右派と分類される (されてきた) 政党が参加していることにみることができる。またもうひとつ、ポーランドの法と正義やチェコの市民民主党に代表される中東欧の政党の EU レベルでの政治グループの受け皿となってきたという点にも、この政治グループの複合性を指摘できる。権威主義化する中東欧の諸政党が母胎となり、北欧・南欧の急進右派政党を引き寄せるという構図がみられるのである。本稿執筆時点 (2024 年 2 月) で ECR を率いるのは、イタリアの同胞のメローニ首相である。こうした複合性にもかかわらず、ECR にヨーロッパ保守主義の流れを明確に見出したのが、スティーブンとザービアックのこの研究であった。つまり、ECR に対して、欧州懐疑主義の傾向ではなく、ヨーロッパ保守主義という思想に光を当てようとした研究だと、換言できよう。それはキリスト教民主主義との相違と同時に、急進右派のハード欧州懐疑主義との差異をも明確にすることによって、ブリュッセルの EU とは異なるまた別のヨーロッパ・プロジェクトを基礎づける思想の存在を明らかにしようとした試みであると、言えるだろう。

では、現在のヨーロッパ統合・EU をもたらした大陸ヨーロッパのキリスト教民主主義とも、またそのような EU に対して厳しい批判を展開しポピュリズム的動員を図ってきた急進右派の懐疑主義とも異なる、ヨーロッパ横断の保守主義とはどのようなものであろうか。スティーブンとザービアックの研究は、イギリス保守主義との連続性を指摘している (*ibid.*, 586-7)。それは、すでにレルースの研究でも指摘されていたユーロリアリズムであり、アトランティシズムと自由市場資本主義をふたつの柱としている。ブリュッセルの EU が超国家的統合を進めるのではなく、各国の主権を守りながら市場統合を進めていく、そしてアメリカ中心の西側同盟の一角を占めていくという方向である (*ibid.*, 594-8)。こうしたイギリス保守主義との連続性は、また同時に、家族的価値の重視にも見出すことができる。ECR とは、スティーブンとザービアックの研究に立脚して整理すると、ヨーロッパ公共圏における保守主義の促進というプロジェクトを進めている集合的政治主体だということになる (*ibid.*, 587)。

しかし、フリーマーケット重視の小さな政府志向という理想は、ECR の構成メンバー政党の多くを占める中東欧諸国の国内体制と、齟齬を来すことはないであろうか。いますこし、スティーブンとザービアックの研究を追ってこよう。

まず自由主義経済路線であるが、ECR の場合、それは EPP の社会的市場経済路線や、S&D のヨーロッパ社会モデル路線とは明確に異なる (*ibid.*, 595-6)。しかし他方で、ECR のリーダー的メンバーであるポーランドの法と正義は、国内において、大規模な社会保障プログラム、財政移転、国家介入、ポーランド資本優先を進めてきた。イギリス保守党のサッチャー主義とは異質

な介入志向である。EU レベルのヨーロッパ社会モデルや社会的市場経済の推進には反対しつつ、国内ではそれ以上の国家介入を進めているのが、ECR のリーダー格、ポーランドの法と正義であった (*ibid.*, 596)。その大きな政府路線は、スティーブンとザービアックの指摘をまつまでもなく、明らかに社会的保守主義 (ソーシャル・コンサヴァティズム) と名づけるべき方向である。これが国内に蔓延るクローニー資本主義の栄養剤になってしまっている現実がある (*ibid.*)。その反面、ECR は欧州議会では資本主義の自由市場モデルを主張する。実際、ECR が欧州議会の域内市場委員会や予算委員会の議長職を手にしてきたことに、スティーブンとザービアックは注意を引いている (*ibid.*)。EU レベルと国内レベルが別枠化されているのである。

では、家族的価値についてはどうであろうか。スティーブンとザービアックは、ECR による自由市場資本主義と社会的保守主義の混合が、1980 年代サッチャー主義の現代的アップグレード版であるという点に注意を引いている (*ibid.*, 598)。家族的価値とくに保守的なキリスト教的価値を重視する点で、法と正義の路線はサッチャー主義に近いものがあるという (*ibid.*, 599)。ECR と S&D、RE との決定的相違がここにある。ECR にとって、同性婚は認められない社会制度である (*ibid.*)。ヨーロッパ社会におけるキリスト教的価値の重視が、ECR の主張となる (*ibid.*)。イミグレーションについても、大量のムスリム移民には強く反対していく。ただしこの点では、必ずしもキリスト教民主主義系 EPP との本質的な分断線とはならない。人の自由移動も、EU 加盟国どうしであれば ECR は基本的に賛成である (*ibid.*)。

スティーブンとザービアックの研究で目を引くのが、ふたつのデータである。第 1 に、ECR は中東欧諸国の中で最大政治グループの地位を確立している。スティーブンとザービアックは、それぞれの政治グループに占める中東欧出身欧州議会議員の割合を調べているが、それによると、ECR の場合、実に 63% に達している (とくに法と正義の議席数が多く、本稿執筆時点では 24 議席を占めている)。この数字は他の政治グループと比べ抜きん出ている。中東欧諸国出身議員が占める割合はキリスト教民主主義系の EPP が 37%、社会民主主義系の S&D が 28%、中道リベラルの RE が 28% と続き、環境主義系の Green/EFA が 8%、急進右派の ID は 4%、急進左派の The Left (GUE-NGL) は 2% に過ぎない (*ibid.*, 589, Table 3)。ECR を率いるリーダーは本稿執筆時点ではイタリア首相メローニであり、急進右派のスペイン VOX も存在感を増しているとはいえ、ECR は中東欧諸国出身の欧州議会議員の組織なのである。第 2 に、ECR 所属議員の投票行動にみられる凝集性にも注目したい。この政治グループに党議拘束は存在しないものの、欧州議会での記名投票に際しては、所属議員の 80% が同一投票行動を実現している。これは EPP やグリーン、S&D や RE と同水準の高さでもある。なお、急進右派の ID 所属議員の投票行動がもっとも凝集性が低い (以上 *ibid.*, 591, Figure 1)。

## (2) ECR の基本文書

ECR の基本文書の内容を確認しておこう。その設立は 2009 年プラハ宣言に拠る。この創設文書が採択されたとき、ECR はイギリス保守党を中心に、8 加盟国 54 名の議員から構成されていた。上述のふたつの研究にみたように、目指すべきはヨーロッパ保守主義の再生であった。下記の表 2 にまとめたものが、イギリス保守党の置き土産でもあるヨーロッパ保守主義の政策思想である。ECR 各国政党の国内でのふるまいとは別の方向性が、欧州議会レベルで推進されていることに留意したい。

表2 2009年プラハ宣言

ユーロリアリズム、開放性、説明責任、デモクラシーを基礎としつつ、私たちの国家の主権を尊重し、経済の回復、成長、競争力に力を注ぐように、EUを改革する緊急の必要性を認識して、私たちはこの2009年にプラハ宣言を採択した。この宣言は次に示す私たちの原則と価値を定立する。

- ・個人の自由と国家の繁栄の究極の触媒としての、自由な企業活動、自由で公正な貿易と競争、最低限の規制、低税率、小さな政府。
- ・個人の自由、個人のさらなる責任、いっそう重要な民主的説明責任。
- ・エネルギー安全保障に重点を置いた、持続可能でクリーンなエネルギー供給。
- ・社会の土台となる家族の重要性。
- ・国民国家の主権的一体性、EU連邦主義の反対、真の補完性への新たな尊重。
- ・大西洋安全保障関係こそ最重要の価値。NATOを再活性化させ、ヨーロッパ中の若いデモクラシー国家を支援。
- ・イミグレーションを効果的にコントロールし、庇護手続きの濫用に終止符を打つ。
- ・効率的で近代的な公的サービスを提供し、農村および都市部のコミュニティの双方の要求に応じていく。
- ・無駄で過度な官僚制を廃止、EU機関やEU基金の利用に関して、いっそうの透明性・誠実性を実現。
- ・全てのEU加盟国を尊重し、平等に対応する。新規加盟国にも旧加盟国にも、大国にも小国にも、すべて平等に対応し尊重する。

出典：European Conservatives and Reformists Group 2009

国家主権の尊重を重視する点では、ハード欧州懐疑主義政治グループIDとの間に基本的な同一性がみられる。しかし、決定的な違いがある。それは、急進右派のIDが、ヨーロッパ文明を強調する点である。IDグループはその設立文書（Identity & Democracy 2019）の第2条で、自由（フリーダム）、主権（ソブリンティ）、補完性（サブシディアリティ）、ヨーロッパ諸国民諸民族のアイデンティティを擁護する政治プロジェクトを推進すると宣言しつつ、そうした政策の基本的方向性は、ギリシャ・ローマとキリスト教の遺産をヨーロッパ文明の支柱とみなすという認識に基礎づけられるという。こうしたヨーロッパ文明の強調は、レイシズムやゼノフォビアに直結するわけではないものの、ヨーロッパと非ヨーロッパの価値的質的差異を強調する（ID所属の）各国内急進右派政党の言説にもみられるものである。その点、ECRのユーロリアリズムは、どこまでもプラグマティズムを旨とする政治志向であり、ブリュッセルのEUが体现する超国家性も、シングルマーケットの構築に限定されかつ加盟国政府に拒否権が認められるかぎりにおいて、賛成する。ヨーロッパ文明なる観念でその優位性を誇るようなことはしない。

### (3) 中東欧権威主義のインパクト

以上の先行研究および公式文書から見えてくるECRのあり方で目立つのは、やはり、EUレベルと国内レベルの相違である。EUレベルのヨーロッパ保守主義と、国内での社会保守主義とは、経済社会政策上、まるで異なるイデオロギーである。権威主義化する中東欧諸国の政策指針と、欧州議会内政治グループの価値規範の間に、緊張関係は存在しないのだろうか。スティーンとザービアックが指摘するように、EU政治と国内政治は、別のコンパートメントに存在しているのであるが（*ibid.*, 596）、欧州議会内政治グループとしての政治行動と、国内での政治行動の間に、衝突は生じないのだろうか。本稿でこうしたマルチレベル政党政治の安定性・不安定性について立ち入って議論することはできないが、中東欧諸国の権威主義化について、言説政治の視点から説明を試みたエンヤディの研究を取り上げておきたい。権威主義化する中東欧諸国内の政治という視点から、ECRというソフト欧州懐疑主義の思想の担い手を見つめ直していく必要がある。ドゴール主義やイギリス保守主義の遺産は、現在ECRを引っ張る中東欧諸国の政治を通じて、変容を遂げているのであろうか。

## エンヤディの研究 (Enyedi 2020)

中東欧諸国が権威主義化していく要因として、エンヤディは権威主義勢力の政治言説に注目し、この言説にイノベーションがあったと主張する。リベラルデモクラシーの西側スタンダードが尊重されなくなったその要因を、権威主義勢力による政治言説のイノベーションに見出そうという解釈の試みは、中東欧諸国出身の欧州議会議員が主導する ECR のこれからを見定めていくためにも、重要な先行研究になるだろう。

まずは背景的要因をおさえておく必要がある。エンヤディは、国際政治構造の変化を重視し、アメリカの孤立主義（トランプ）、欧州統合の停滞、ロシアの威圧強化、中国の影響力増大を指摘する (*ibid.*, 363)。また各国内の構造的要因として、2008 年の経済危機、2015 年の難民危機、以上を通じて露呈した市民社会の構造的な弱さという点に注意を引く (*ibid.*)。1990 年代の東欧革命以降、国家再創生という課題を引き受けてきた政治指導者たちは、当初はリベラル・デモクラシーを採用する以外に選択肢はなかったのであるが——EU 加盟のためのコペンハーゲン基準達成がその具体的な実践となった——こうした国際政治及び国内政治における構造的変化を通じて、もはや西欧タイプのリベラル・デモクラシーに頼ることができなくなり、そこでリーダーたちは権威主義を受容させるようなイデオロギーの革新 (*authoritarian ideological innovation*) を進めていくようになり、その方向で政治言説を変容させ、新たな政治の形 (*political configurations*) を受け入れさせようとしていったとエンヤディは主張する (*ibid.*, 364)。では、東欧革命後の、リベラル・デモクラシー的要素が支配的であったメインストリームの政治言説は、どのように革新されたのであろうか。

エンヤディが指摘するのは次の 4 点である (以下 *ibid.*, 365-74)。ひとつは西欧へのルサンチマンを利用した東欧優位の思想である。西欧は要求ばかりして支援はしない、東は劣っているとみなしているという世論の感情を利用しつつ、経済危機や難民危機を経た西欧の衰えや、中東欧諸国の歴史的にも稀な相互友好関係の実績(ハンガリーとスロバキアの良好な関係などが最たる例)をもとに、もはや劣位の感情を持つ必要はないという方向へ世論を引っ張っていったという (*ibid.*, 365-8)。つぎに、文明主義的反移民感情の浸透である。文明的優位をもとにした移民抑制論が声高に進められていった (*ibid.*, 369)。それから、強い国家信仰を再意識化させ、市民社会への不信を植え付けていったという点が挙げられている。小さい国家ではなく、また西欧風リベラル・デモクラシーで称揚される市民社会団体でもない、そのどちらも責任を果たすことはできない、強い政治家が大きな国家を率いてはじめて、必要な政策を推進できるという主張である (*ibid.*, 369-71)。最後に、キリスト教政治アイデンティティの涵養である。この文脈では、本来のヨーロッパの価値の実現が主張される (*ibid.*, 371-2)。こうして、西欧へのルサンチマンを利用した、文明主義的反移民思想と強い国家信仰に依拠した、政府によるポピュリズムの推進が、権威主義的政治を国民に受容させた言説的革新の内容である。エンヤディは、国家によるパターナリスト・ポピュリズムが、権威主義的政治家への支持を拡張していったのだと、論じている (*ibid.*, 373-4)。

こうしたエンヤディの研究は、ハンガリーのオルバン首相率いるフィデスの ECR 加盟の動きを念頭に置いたとき、その重要性が増してくる。ECR 構成政党のそれぞれの国内での政治の方向性は、ヨーロッパ保守主義による、自由市場資本主義を基調とした小さな国家志向との間に、強い緊張関係を発生させるはずなのだが、フィデスの ECR 参加が現実となれば、その度合いは深まるはずだ。オルバンの理念をおさえておこう。

### オルバンの思想 (Orbán 2019)

2019年9月14日のスピーチで、オルバンは、ハンガリーそしてヨーロッパ諸国の歩むべき方向性が、リベラル政治転換 (a liberal political transformation) からキリスト教政治転換 (a Christian political transformation) への移行になるべきだと、訴えている。彼によると、この移行は、リベラル政治を修正することによって真の自由を完成させるための転換なのだという。これは、リベラル政治による自由はキリスト教デモクラシーによるキリスト教的自由へ帰結しなければならない、という主張でもある。個人の単なる自由ではなく、経済的自己利益の自由な追求でもない。自らが他者に拒絶したいことを、自ら他者に為してはならないという原則なのだという。ここでオルバンはもちろん、西欧リベラリズムの個人主義と、リベラル EU の干渉主義の双方を批判している。世界は民族に分割されている。けっして、個人が実体的存在なのではない。民族は文化と歴史により定義された個人の共同体である。リベラル・デモクラシーが主張する個人のプライベートなことがらが重視されてはならない。どこまでも社会の共通善が優先されなければならない。オルバンは強調する、我々はヨーロッパの実存のより深い意味を理解すべきであり、ヨーロッパの使命はキリスト教的自由を再生しこれを永続させていくことにあるのであり、ヨーロッパ人はこのことに気がつかなければならないのである、と。これまではリベラル時代精神 (Zeitgeist) が全世界に対する西欧のヘゲモニーを可能にしていたが、しかしいまや、異なる風が吹き始めているとオルバンは言う。彼の言葉を引いておこう。

「リベラル・フリーダムに立脚したリベラル・デモクラシーがヨーロッパに目的意識を与えるというようなことは、もはやない。リベラル・デモクラシーはヨーロッパの実存に深い意味を与えることができない。ヨーロッパがそれ自身で象徴しているものとはいったい何であるか。それはこの大陸が跡形もなく沈んでしまったときに、世界が失ってしまうものでもある。ヨーロッパによる文明化の計画とは何であるか。現在の新たな状況に対応するために我々キリスト教民主主義者こそが提起できるヨーロッパの明確な文明ミッションとは何であるか。それはすなわち、キリスト教的自由の、またキリスト教的自由を土台とした生活スタイルの、創造および永続的再生というミッションである。」 (Orbán 2019: para.9)

こうしたオルバンのキリスト教政治共同体論が、ドゴール主義およびイギリス保守主義との間に、共通の根をもつものであるかどうか。本格的な思想研究が求められるところである。本稿では次の点を指摘するにとどめざるをえない。フィデスの参加が叶えば、ECR の現在の政策方針文書に、キリスト教の文言が挿入されていくことになりかねない。それは意味内容的には、ECR の路線に本質的な変容を引き起こす。ECR は EU レベルと国内レベルを別枠化して、異なったイデオロギーを別次元に共存させておくという路線を進めてきたのだが、オルバンの思想は、これを不可能にする論理を胚胎している。それほどに根強いリベラリズム批判が、オルバンの思想にはみられる。もちろん、ユーロリアリズムの名のもと、フレキシブルに順応していく可能性も完全には否定できない。あるいは、こうした言説は結局は彼のクローニー資本主義をデコレートするだけの表面的なものに過ぎず、やがては国内の反発により失脚していくことになる可能性にも、留意しておくべきであろう。仮にオルバンがユーロリアリズムに依拠したフレキシブルな順応を見せるとすれば、それは EU 政治システムの陶冶機能という視点からの分析が必要になるだ

ろう。

#### (4) ECR の現在

フィデスの ECR 参加を予測させるメディアの報道は数多い（たとえば Nardelli & Albanese 2024; Wax 2024a; 2024b; Note from Poland 2024 など）。フィデスは、2021 年 3 月に EPP を脱退したのち（この間の経緯について山本 2023 の労作を参照のこと）、その議席数（2019 年選挙で 13 議席獲得）の多さから、どの政治グループに所属するのかが注目された。オルバン自身も、VOX 党首アバスカルを迎えて微笑ましげに握手を交わす写真入りのメッセージを X にポスト（旧 Twitter にツイート）している<sup>5</sup>。欧州議会選挙について話し合ったのだという。あきらかにフィデスを ECR へ迎え入れようという動きの一環である。問題は、スウェーデン民主党の反発だ。自国の NATO 加盟を最後まで妨害していたハンガリーの与党フィデスが ECR に参加することに対して、不信感は免れまい。スウェーデン民主党は、フィデスを迎え入れた場合、大西洋同盟を守り抜こうとしてきた ECR の信用に傷がつくという。同様の牽制がすでにベルギーの新フラームス同盟（N-VA）やチェコ市民民主党（ODS）にも観られるところであり（Nicolás 2024）、フィデス参加は予断を許さない状況ではある。しかし、ECR を率いるメローニのイタリアの同胞は、2023 年 12 月の欧州理事会におけるオルバンの妥協を評価している（Wax 2024b）。オルバンはいわゆる珈琲ブレイク棄権によって、ウクライナと EU の加盟交渉開始を事実上承認している。

また ECR 自身も、フランスの極右政治家ゼムールが率いる再征服（Reconquest!）を迎え入れるなど、構成政党の混合化が目立つ。再征服が ID ではなく ECR に接近したのは、ルベン一族内の対立によるものだという指摘もあり（マリーヌ・ルベンが仲違いしている姪のマリオン・マレシャル＝ル・ベンが再征服の重要人物であり、彼女の夫のヴィンチェンゾ・ソフォが再征服の ECR 参加を手引きしたのではないかと指摘されている。ソフォは ECR に参加しているイタリアの同胞所属の欧州議会議員である）、ECR の政治グループとしての安定性には注意が必要な状況が生起している（以上は Derbyshire 2024 より）。

#### おわりに

欧州議会内政治グループには、ヨーロッパ・レベルへの価値媒介者としての役割を見いだせる。それゆえ欧州懐疑主義政治グループの反 EU 言説が重要になる。その言説が EU 政治システムに結局は適合するように修正されていくのか、あるいはどこまでも否定的なのか。これを見定めていくことが求められる。EU 政治システム内の反体制派として、欧州懐疑主義政治グループの言動を把握していくことは、EU 政治システムの安定性を評価する作業にも繋がっていく。欧州懐疑主義政治グループが、EU 政治システムをコントロールしてしまうほどのパワーを手にしていくのか（これは、欧州懐疑主義政治グループが潜在的に有する欧州政党としての影響力が、欧州委員会および EU 理事会／欧州理事会へと浸透していく、という事態でもある）。あるいは、結局は欧州議会に具わっている陶冶の機能が、欧州懐疑主義政治グループを健全な批判勢力へと変容させていくことになるのか。本稿はこうした研究プロジェクトを準備していく作業の一環としての、研究ノートに過ぎない。しかし、今回取り上げた ECR は、欧州懐疑主義が反 EU に終始するシンプルな反体制的運動に尽きるものではないことを、われわれに教えてくれる。EU 法優

<sup>5</sup> Victor Orbán による 2023 年 12 月 10 日付の X におけるポスト（旧 Twitter のツイート）。<[https://x.com/pm\\_viktororban/status/1733551519662821622?s=61&t=CVzXFjBGxjR4uJ4jUQsfw](https://x.com/pm_viktororban/status/1733551519662821622?s=61&t=CVzXFjBGxjR4uJ4jUQsfw)>。

位の原則と EU 司法裁判所の判断によって、加盟国の国家主権に侵入していくタイプとは異なる政治システムが、ユーロリアリズムの理念のもと、構想されている。その路線はドゴール主義やイギリス保守主義の伝統を受け継ぎつつも、中東欧のとくにキリスト教政治共同体論をベースにした権威主義化の流れの中で変容し、新たに勢力を拡大しそうな状況にある（本稿最終校正時点で、ECR は『聖ベネディクトのビジョン：保守主義価値憲章』を採択した（2024年3月23日）（European Conservetists and Reformists Groups 2024）。この憲章では家族主義の価値を強調し、性の多様性を訴えるウォキズムを強く批判、ヘレニズム・ローマ・キリスト教の伝統に基づくヨーロッパ諸国民の文化的多様性、それぞれの主権の尊重が訴えられている。傾向的にはあるが、イギリス保守主義の伝統を引き継ぐ自由市場資本主義+アトランティシズムには触れられることなく、オルバンの方向へ移行しているように観ることができる）。以上が本研究ノートによって整理された内容である。本研究プロジェクトの次の課題は、急進右派のハード欧州懐疑主義勢力および急進左派のブリュッセル批判勢力の言説を検討していくことである。

## 参考文献

- Behm, A-S. and Brack, N. (2019) Sheep in Wolf's Clothing? Comparing Eurosceptic and Non-Eurosceptic MEPs' Parliamentary Behaviour, *Journal of European Integration*, 41:8, pp.1069-1088.
- Bortun, V. (2022) Plan B for Europe: The Birth of 'Disobedient Euroscepticism'? *Journal of Common Market Studies*, 60:5, 1416-1431.
- Börzel, T.A. and Hartlapp, M. (2022) Eurosceptic Contestation and Legislative Behaviour in the European Union, in Ahrens, P., Elomäki, A. and Kantola, J. eds., *European Parliament's Political Groups in Turbulent Times*. Palgrave Macmillan, pp.97-122.
- Brack, Nathalie. (2012) Eurosceptics in the European Parliament: Exit or Voice? *European Integration*, 34:2, 151-168.
- Brack, N. (2018) *Opposing Europe in the European Parliament Rebels and Radicals in the Chamber*. Palgrave Macmillan UK. KindleVersion.
- Brack, N. and Wolfs, W. (2023) *European Political Parties: Poorly Identified Political Bodies?* Jacques Delors Institute.
- Cunningham, K., and Hix, S. (2024) A Sharp Right Turn: A Forecast for the 2024 European Parliament Elections. *Policy Brief*. European Council of Foreign Relations. <<https://ecfr.eu/publication/a-sharp-right-turn-a-forecast-for-the-2024-european-parliament-elections/>> (accessed January 24, 2024)
- De Vries, C. E., (2018) *Euroscepticism and the Future of European Integration*. Oxford University Press. Kindle Version.
- Derbyshire, J. (2024) Faultlines divide parties on Europe's far right, *Financial Times*, 20 Feb 2024.
- Enyedi, Z. (2020) Right-wing authoritarian innovations in Central and Eastern Europe, *East European Politics*, 36:3, 363-377.
- European Conservatives and Reformists Group (2009) The Prague Declaration. <<https://ecrgroup.eu/ecr>> (accessed January 24, 2024).

- European Conservatives and Reformists Group (2020) Our vision for Europe. <[https://ecrgroup.eu/vision\\_for\\_europe](https://ecrgroup.eu/vision_for_europe)> (accessed January 24, 2024).
- European Conservatives and Reformists Group (2024) The Benedictine Vision: A Charter for Conservative Values, Signed in Subiaco on 21 March 2024. <[https://mcusercontent.com/82d965dcba0981b7182e9dfd7/files/fa4fda67-617b-36d7-dc36-9548686f7367/ECR\\_CHARTER\\_OF\\_VALUES\\_Subiac024.pdf](https://mcusercontent.com/82d965dcba0981b7182e9dfd7/files/fa4fda67-617b-36d7-dc36-9548686f7367/ECR_CHARTER_OF_VALUES_Subiac024.pdf)> (accessed March 23, 2024).
- Hooghe, L. and Marks, G. (2008) A Postfunctionalist Theory of European Integration: From Permissive Consensus to Constraining Dissensus, *British Journal of Political Science*, 39, 1-23.
- Identity & Democracy (2019) *Statutes of the Identity and Democracy (ID) Group in the European Parliament*. <[https://assets.nationbuilder.com/idgroup/pages/54/attachments/original/1673443377/NEW\\_ID\\_Statutes\\_\\_EN\\_11.2022.pdf?1673443377](https://assets.nationbuilder.com/idgroup/pages/54/attachments/original/1673443377/NEW_ID_Statutes__EN_11.2022.pdf?1673443377)> (accessed February 9, 2024).
- Kaeding, M., Pollak, J., and Schmidt, P. (2021) *Euroscepticism and the Future of Europe: Views from the Capitals*. Palgrave Macmillan. Kindle Version.
- Keith, D. (2018) Opposing Europe, Opposing Austerity: Radical Left Parties and the Eurosceptic Debate, in Leruth, B., Startin, N., and Usherwood, S., eds., *The Routledge Handbook of Euroscepticism*, Routledge, pp.86-99. Kindle Version.
- Landorff, L. (2019) *Inside European Parliament Politics Informality, Information and Intergroups*. Palgrave Macmillan. Kindle Version.
- Leruth, B. (2018) Transnational and Pan-European Euroscepticism: The Case of the European Conservative and Reformists, in Leruth, B., Startin, N., and Usherwood, S. eds. (2018) *The Routledge Handbook of Euroscepticism*, Routledge, pp.384-396. Kindle Version.
- Leruth, B., Startin, N. and Usherwood, S. (2018) *The Routledge Handbook of Euroscepticism*. Routledge. Kindle Version.
- Leruth, B., Startin, N., and Usherwood, S. (2018) Defining Euroscepticism: From a Broad Concept to a Field of Study, in B. Leruth, N. Startin and S. Usherwood eds., *The Routledge Handbook of Euroscepticism*. Routledge. Kindle Version.
- Mariano, N. and Schneider, C. J. (2022) Euroscepticism and Bargaining Success in the European Union, *Journal of European Public Policy*, 29:1, 61–77.
- Nardelli, A. and Albanese, C. (2024) Meloni Pushes Hungary’s Orbán to Unlock Ukraine Aid in Back-Channel Talks. *Bloomberg*, Updated on January 11, at 17:15 JST.
- Nicolás, E. S. (2024) Von der Leyen Rejects Extremist Parties, Leaves Door Open to ECR, *EUobserver*, Brussels, 21. FEB, 16:30.
- Orbán, V. (2019) *Prime Minister Viktor Orbán’s speech at the 12th Congress of the Federation of Christian Intellectuals (KÉSZ)*. 14 September 2019, Budapest. <<https://abouthungary.hu/speeches-and-remarks/prime-minister-viktor-orbans-speech-at-the-12th-congress-of-the-federation-of-christian-intellectuals-kesz>> (accessed February 22, 2024).
- Note from Poland (2024) PiS “Open” to Orbán Joining its European Group and Condemns EU “blackmail” against Hungary. Feb 1, 2024. <<https://notesfrompoland.com/2024/02/01/pis->

- open-to-orban-joining-its-european-group-and-condemns-eu-blackmail-against-hungary>  
(accessed February 20, 2024)
- Soler, P. (2024) EU Parliament will see Far-right surge at election, study says. *EUobserver*, January 24, 2024. (accessed January 24, 2024)
- Steven, M. and Szczerbiak, A. (2023) Conservatism and 'Eurorealism' in the European Parliament: the European Conservatives and Reformists under the leadership of Poland's Law and Justice, *European Politics and Society*, 24:5, 585-602.
- Szczerbiak, A., and Taggart, P. (2018) Contemporary Research on Euroscepticism: The State of the Art, in Leruth, B., Startin, N., and Usherwood, S., eds., *The Routledge Handbook of Euroscepticism*, Routledge, pp.11-21. Kindle Version.
- Treib, O. (2021) Euroscepticism is Here to Stay: What Cleavage Theory Can Teach Us about the 2019 European Parliament Elections, *Journal of European Public Policy*, 28:2, 174-189.
- Wax, Eddy. (2024a) Former Polish PM Borowiecki 'Open' to Teaming up with Orbán at EU Level. *POLITICO*, January 31, 2024, 1:25 PM CET. < <https://www.politico.eu/article/former-polish-pm-morawiecki-open-teaming-up-with-hungary-orban-eu-level-ecr-group/>> (accessed February 20, 2024)
- Wax, Eddy. (2024b) Cracks appear in Euroskeptic Camp as Orbán Stalks the Parliament. *POLITICO*, February 9, 2024, 12:28pm CET. <<https://www.politico.eu/newsletter/eu-election-playbook/cracks-appear-in-euroskeptic-camp-as-orban-stalks-the-parliament>> (accessed February 20, 2024)
- 白井陽一郎 (2023) 「多様化する欧州懐疑主義、岐路に立つ EU：リベラリズムが揺らぐとき」 広瀬佳一・小久保康之編著『現代ヨーロッパの国際政治：冷戦後の軌跡と新たな挑戦』、101～120 頁。
- 金丸輝男 (1982) 『ヨーロッパ議会—超国家的権限と選挙制度』 成文堂。
- 児玉昌己 (2021) 『現代欧州統合論：EU の連邦的統合の深化とイギリス』 成文堂。
- 児玉昌己 (2004) 『欧州議会と欧州統合：EU における議会制民主主義の形成と展開』 成文堂。
- 徐輝翎 (2021) 「欧州懐疑主義の起源と展開について」『東北法学』第 55 号、49-84 頁。
- デイ、ステイーブン (2020) 「欧州議会の院内会派」 鷲江義勝編著『EU: 欧州統合の現在』第 4 版、創元社。
- 西川太郎 (2023) 「欧州議会へのロビイング：政党グループの「まとまり」の観点から」『国際政治』第 208 号、156-208 頁。
- 原田徹 (2018) 「EU 懐疑主義としてのポピュリズムと福祉ショーヴィニズム」『グローバル・ガバナンス』第 4 号、55 - 67 頁。
- 山本直 (2023) 『オルバンのハンガリー：ヨーロッパ価値共同体との相剋』 法律文化社。
- 吉田徹 (2011) 「欧州統合過程とナショナルな政党政治：『欧州懐疑主義政党』を中心に」『法学研究』第 84 巻第 2 号、633 - 672 頁。